

研究主題

中学校通常の学級及び高等学校における 発達障がいのある生徒への 適切な指導と必要な支援に関する研究

—特別支援教育研修資料の作成を通して—

【研究担当者】 佐藤 文 円 佐々木 恵理子
横澤 修 梅野 展和
五安城 正敏

【この研究に対する問い合わせ先】

TEL 0198-27-2821 FAX 0198-27-3562

E-mail sien-r@center.iwate-ed.jp

特別支援教育の現状と研究の概要

県内中学校通常の学級及び高等学校では、発達障がいのある生徒の理解や指導に苦慮している状況が見られます。それは、多くの教職員が、特別支援教育に関する基礎的な知識等が十分ではなく、教育的ニーズを把握し、適切な指導及び必要な支援を計画的、組織的に行うことにつながらないためであると考えられます。

こうしたことから本研究は、中学校及び高等学校の教職員が、校内研修会や個人研修において活用することができるような特別支援教育研修資料を、県内中学校及び高等学校の現状を踏まえながら作成し、生徒一人一人への適切な指導や必要な支援の充実につなげていくことを目的としました。

県内実態調査から明らかになったこと

平成21年度特別支援教育体制整備状況調査及び、県内全公立中学校及び高等学校を対象とした特別支援教育に関する実態調査の結果から明らかになった主な課題は、以下の通りです。

- ・本県の中学校及び高等学校においては、特別支援教育に関する教員の研修状況、校内特別支援教育委員会の開催回数、個別の指導計画の作成率が、全国に比して極めて低い。
- ・特別支援教育に関する研修の必要性を感じているものの、他の研修課題を優先したり、放課後に校内研修会の時間を設定することが困難だったりすることから、実施できずにいる。
- ・具体的な場面における指導・支援について困難さを感じている。

研修資料の概要

研修資料は、特別支援教育に関する基礎的知識や見通しをもつことを目的とした「理解編」と、具体的な取組につながる資料を収めた「活用編」で構成しました。

「理解編」は、手元に置いて活用できるように冊子とし、第1章では特別支援教育の基礎的内容を取り扱い、第2章では中学校及び高等学校による実践を取り扱うこととしました。

「活用編」は、生徒への支援方法を検討したり、関係する教職員がそれらを共通理解したりするための道具である個別の指導計画を作成・活用するための支援ソフトと、その取扱説明書で構成しました。

研修資料作成に係る実践

研修資料「理解編」と「活用編」の有効性と、改善の視点を明らかにするために、研究協力校の教員及び研究協力員へのアンケート調査を行いました。この結果から、中学校及び高等学校の生徒への適切な指導及び必要な支援に有効であるという見通しをもつことができました。また、この調査の分析と考察を受け、研修資料「理解編」と「活用編」をそれぞれ修正・改善したものが、「中学校・高等学校版 すべての生徒が輝く指導・支援のすすめ」と「個別の指導計画作成支援ソフト（中学校・高等学校版ver.1）」です。



研修資料「理解編」
「中学校・高等学校版
すべての生徒が輝く指導・支援のすすめ」表紙



ここがポイント！

特別支援教育の基礎的知識が理解できる！

- ・第1章と第2章①②では、特別支援教育を踏まえた学習指導、生徒指導等の考え方やポイントを示しています。
- ・統一したレイアウト、平易な語句の使用、多色刷り等により、読みやすく理解しやすい構成になっています。
- ・本文で扱っている用語や、実際に取り組む際に必要な基礎的知識等を、脳帯を使用して解説しています。
- ・特別支援教育に関する知識をさらに深めたり、広げたりするための参考となる図書を紹介します。

特別支援教育の視点を踏まえた実践への見通しをもつことができる！

- ・第2章③以降では、学習指導や生徒指導、進路指導等についての中学校や高等学校の実践例を掲載しています。
- ・「①自校の実態にあった特別支援教育の推進」として、校内支援体制に基づく進め方について示しています。
- ・個別の指導計画の考え方や「個別の指導計画作成支援ソフト」の紹介により、具体的な取組につながります。
- ・巻末資料により、どのような目的でどのような機関に相談すればよいのかが分かります。

読みやすく、理解しやすいように、1項目を見開き2ページで取り扱っています。

第1章 教育支援が必要な生徒に対する指導・支援の基本

4 学習指導のポイント

4 学習指導のポイント

～「急がば回れ」到達度の確認と基礎・基本の補充で「分かる」授業を！～

各項目の概要やまとめについて示しています。

- 中学校では、基礎・基本を大切に学習を個別に配慮して行う機会を作り、学び残しがないようにする。学習への苦手意識を強めないようにする。
- 高校では、生徒の進路目標を踏まえた上で、必要な学習を精選する。補習や補充を積極的に行い、原級留置の要件に当たらないように予防的対応をする。

第1章から第2章①、②では、各項目における基本的な考え方を示しています。第2章③以降では、実践例を示しています。

【学び方を教える】
教科等の内容を身に付けるためには、生徒に学びの構えがあることが必要です。そのために、学校において、学習規律の指導をすることが必要です。小学校低学年の教室を思い浮かべると、教室の前方には正しい座り方や歩き方の写真が貼ってあったり、教師が「背中がピンはだけた」と分かりやすく教えたりしながら、子どもたちが常に意識できるような指導をしています。中学校や高等学校においても、生徒が学習規律を常に意識できるように指導すると共に、チャイムと同時に授業を始めること、教師自身が正しい話し方や立ち居振る舞いをする必要があります。

【学習規律の一例】
●チャイムと共に授業を開始。
●しっかりと挨拶をする。
●正しく椅子に座る。
●次の時間の学習準備。
●話す声を見えなくする。
●「～です。」「～です。」「～だと思います。」のように、丁寧に話す。
●ノートをとる。
●私語をしない。
●机、ロッカーの整頓。
●机上の整頓。

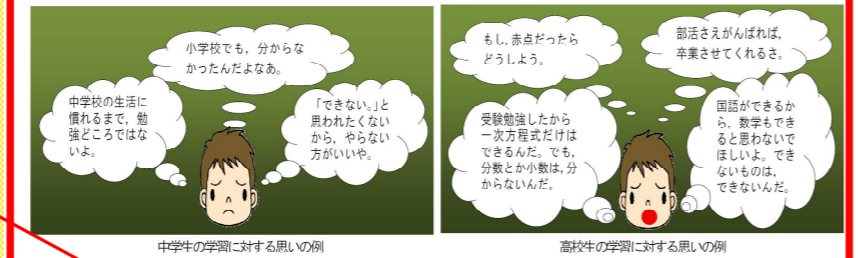
【学ぶは「まねる」】
学ぶことは、まねることです。正しい動作や方法をまねることが、学習の基本です。それは、社会性についても同じことが言えます。学習内容の理解と社会性の理解は、切っても切り離せないものです。学習と社会性の両側面を、教師自らから手本となり、生徒を指導・支援していくことが大切です。

【情緒の安定のないところに「学び」はない】
人は不安なときやイライラしているときは、何事にも身が入らず、上の空になってしまいます。生徒の不安を取り除き、落ち着いた気持ちで生活することができるようになることが必要です。

各項目に関する考え方や、おさえておくべきこと、本文の説明、特別支援教育に関する情報、用語の解説などを示しています。

指導・支援のポイントについて、中学校、高等学校ごとに分けて示しています。

1 授業が分からないと学校はつまらない



学校生活の大部分は授業です。授業が分からないと感じている生徒は、学校という場所をつまらないものと感じています。部活動等で、自分のもっている力を発揮することができたとしても、それは、学校生活の中心ではない部分の時間にしかすぎません。また、教師が授業における生徒の成長に力を尽くさないという事は、教育課程そのものをおろそかにしているということにもつながるのではないのでしょうか。

教師は、教育課程の根幹をなす授業でこそ、生徒のもつ能力を最大限に引き出す責務があります。「勉強でできなくても部活動だけ頑張ればいい」、「一斉指導なのだから理解できない生徒がいても仕方ない」という風潮は、決して認められるものではありません。

2 「やらない」のは「知らない」のかも

学校という集団の場で学ぶためには、身辺自立や基本的な生活習慣といった教科以前の学習も大切にしなければなりません。また、学ぶための構えや学び方が身に付いてこそ、学校という場での学習が可能になり、自ら学ぶことができるようになるのです。

中学生や高校生になると、「椅子に正しく座る」「丁寧に文字を書く」といったことは、今さら教えずとも当然できることとされ、「やらない」のは、本人が「わざとそうしている」のだと思われがちです。しかし、実際にはその力が身に付いていないのかもしれないかもしれません。生徒が「できない」のは「正しいやり方を知らない」だけなのかもしれません。中学校、高等学校の教員はできないことを叱責せず、「正しい知識や方法」を丁寧に個別に教えることが大切なのです。

3 中学校でのポイント ～ 個別の指導で再学習 ～

- 到達度を常に把握して、一斉指導における個別の指導や、特別な時間を設定して個別に指導することを通して、学び残しがないようにする。
- 中学校からスタートする外国語(英語)は、他の教科に比べて到達度の開きが小さいことから、一人一人の学び方に合わせた指導で、特に学ぶ喜びと達成感を大切にします。

4 高校でのポイント ～ 進路目標を中心に据えた学習 ～

- 生徒の得意なことや興味関心を把握し、苦手なことについても生徒と一緒に確認する。その上で、生徒の興味関心や特性に応じた進路目標の設定ができるようにする。
- コーチングの手法を取り入れ、進路目標と学習内容を関連させる。生徒の自己選択・自己決定を大切にしながら、「分かる」授業による指導・支援を徹底する。

【到達度を踏まえる】

これまでの「本時の学習内容をどのように指導すればよいか」という授業づくりから、「本時の学習内容の系統性を踏まえる」と、○○さんの到達度は、～なので、本時の学習内容を支える～の段階についても取り扱う必要がある」というように、県内小学校で行われている一人一人の到達度を踏まえた授業づくりへと変えていかなければなりません。それが真の学力向上への第一歩です。

【できると分かる】

「できる」ことは、理解つまり「分かる」ということと必ずしもイコールにはなりません。また、ある時期の学習内容だけではしっかりと理解してたり、最近の学習内容ができていたりするため、一見するとそれ以前の学習内容も当然理解していると思われがちです。教科の系統性を踏まえた上で、生徒の到達度を把握することが大切です。

【「評価」は「指導の評価」】

定期考査において、点数が低い生徒がいた場合、「生徒に即した指導が行われなかった」、「生徒に即した指導を行ったとしても、それを測る問題ではなかった」のです。最大限に平常点を加味して進級させたとしても、生徒の成長や学ぶことの喜びには、つながりません。指導と考査問題の改善が何よりも必要なのです。

Q&A

支援が必要な生徒ほど、家庭学習を怠っています。
生徒が、家庭学習をやっていない要因は、本当に怠けや甘えだけなのでしょうか。「何をすればよいのかわからない」、「宿題が難しすぎたり、時間がかかりすぎたりする」、「宿題をしても授業やテストにあまり役に立たない」などの一次的要因が、怠けや甘えといった二次的要因を引き起こしているのではないのでしょうか。あるいは、これまでの育ちの中で、そういった気持ちが構築されてはいないのでしょうか。家庭学習においても、生徒に即した課題や取組方法を検討していくことが大切です。生徒が授業で学んだ内容や次時に役立つ内容について、生徒の到達度や課題に要する時間などを踏まえ、本当の意味で生徒に適した課題として与えることが大切です。

5 授業のユニバーサルデザインですべての生徒に分かる授業

授業のユニバーサルデザインとは、障がいのある生徒も含め、すべての生徒が学びやすくなるための広い意味での教育環境づくりです。

観点	生徒にあわせる	わかりやすくつづえる	生徒をみとめる
授業の構成 教材教具	・達成可能な目標やねらいを設定する。 ・活動内容や課題の難易度を数種類用意し、生徒が選択できるようにする。 ・授業に複数の活動を取り入れる。 ・内容が理解できているか確認する。 ・教科書以外の機器や教材を活用する。 ・多様な教材を用意する。	・目標やねらいを分かりやすく伝える。 ・生徒に学習の流れを伝える。 ・授業で準備しておくことを伝える。 ・機器や教材の使い方を明確に示す。 ・様子把握するための中間支援をする。 ・解答を導くための手がかりを伝える。	・伸びる力に目を向ける。 ・取り組みたいと思う学習場面を作る。 ・互いのよさを認め合う機会をつくる。 ・約束事が守られたり、望ましい行動をとったりしたときには、すばいほめる。 ・生徒同士や生徒自身が学習内容の振り返り機会を設定する。
学習形態	・生徒の特性を踏まえて役割を決める。 ・メンバーに留意してグループを決める。 ・教師間の連携をとる。 ・到達度や学習のねらいに合わせた学習形態を考える。	・ねらいを分かりやすく伝える。	・生徒同士が互いのよさを認め合う場面を設定する。 ・肯定的な意味付けでグルーピングする。
指示の出し方	・作業や課題は達成可能な量になるように、小さなまとまりに分ける。 ・生徒に合わせた指示の出し方や話し方を考える。	・適切な声量で聞き取り、ゆっくり話す。 ・簡潔で分かりやすい言葉遣いで伝える。	・生徒が話そうとしていることを、適切な言葉で表現したり補ったりする。 ・好奇心、やる気をそそる発問を工夫する。
板書・ノート指導 プリント指導	・分かりやすい文字の大きさを書く。 ・文字を詰めず分かりやすい文字数にする。 ・分かりやすいレイアウトにする。 ・教師が板書する時間を短くする。 ・プリントは見やすいレイアウトにする。 ・ノートをとる時間を十分に確保する。	・板書の書式を決めて伝える。 ・ノートをとる箇所をはっきりさせる。 ・黒板に指示内容を書く。 ・ノートやプリントに書く内容と書き方を具体的に伝える。 ・ノートのとり方を指導する。 ・「〇〇分まで」と終わりの時間を黒板に書いて伝える。	・必要なが書いていることをほめる。 ・少しでも書いていることを認めてほめ、最後まで取り組み続けられるように励ます。

【あ・つ・みプランと子どものつまずき対応表(国立特別支援教育総合研究所、2010年参考)】

実際の指導・支援に生かすことができるような内容を、図や表をまじえながら示しています。

指導・支援を支えるために必要な考え方や方針、各項目において欠かすことのできないことなどについて示しています。

6 定期考査に向けて、十分な対策をとる

中学校においては学ぶことへの苦手意識を強めないため、高等学校においては原級留置の要件に当たらないよう、補習・補充指導を十分に行うことが必要です。

定期考査に向けては、考査範囲、学習方法・計画等を生徒自身が理解し、実行していかなければなりません。これらのことが理解・実行できないために、学習の内容理解や習熟が図られなく、定期考査の成績が伸びない生徒もいます。

教師は、授業における学習指導に加えて、考査範囲、学習方法・計画についても明確に示し、それらについて生徒が理解し家庭学習として実行できているか評価することを行っていくことも必要です。その結果によっては、補習指導を強化することも考えられます。

現場の先生方の悩みや解決したいことなどについて、Q&A形式で示しています。

【他ページのQ&A例】

- ・どうしても単なる怠惰にしか見えませんが…。
- ・何を言っても反抗するばかりで指導できません。
- ・保護者が納得せず、進路の話が、進みません。
- ・支援員さんに授業を頼もうと思うのですが…。
- ・本校には、支援を必要としている生徒はいません。

「個別の指導計画作成支援ソフト（中学校・高等学校版 ver.1）」※研修資料「活用編」



特別支援教育の視点を踏まえた、個別の指導計画による一貫性のある継続した取組ができる！

- ・問題を整理し、取り組むべきことを焦点化できます。【Step1】
- ・生徒の様子から推測される背景、想定される支援方法を絞り込むことができます。【Step2】
- ・「個別の指導計画」シートをそのまま活用したり、学校等の実情に合わせて様式を変えたりするなどして、個別の指導計画として活用できます。【Step3】
- ・入力したデータを保存・印刷することにより、成長の記録や引き継ぎ資料、会議資料等として活用できます。【Step1】【Step2】【Step3】

ここがポイント！

Step 1 問題の整理と焦点化

Step 2 背景の理解

生徒の様子について、学習面、生活面・行動面、その他、担任のニーズ、生徒や保護者のニーズ、生徒の長所等の観点から整理します。

生徒の様子やこれまでの対応を整理し、緊急度や指導の難易度等の観点から、優先項目を決定します。

参考になりそうな支援方法のコード番号を選択することにより、「個別の指導計画」シートに内容が転記されます。

「データベース」シートを使って、分類項目にフィルターをかけ、生徒の様子から生徒の特性を絞り込みます。

Step 3 具体的な支援方法の検討

「今後の支援方針や支援方法」欄には、特別支援教育コーディネーター等と話し合いながら記録します。
 「目標、評価時期」欄には、優先項目についての具体的な目標や評価を記入します。
 「評価」欄には、取り組んだ結果についての評価を記入します。

「個別の指導計画（教科担任等による役割分担用）」には、今後の支援方針や目標をもとにした、各教科担任や担任以外の方が、生徒にかかわる場合の目標について記入します。

研究の成果

- 1 「中学校・高等学校版 すべての生徒が輝く指導・支援のすすめ」は、特別支援教育に関する基礎的知識の理解や、特別支援教育の視点を踏まえた実践につながるという見通しをもつことができました。
- 2 「個別の指導計画作成支援ソフト（中学校・高等学校版ver.1）」は、特別支援教育の視点を踏まえた個別の指導計画による取組につながるという見通しをもつことができました。

研究内容の詳細は、当センターWebページに掲載しております。「中学校・高等学校版 すべての生徒が輝く指導・支援のすすめ」、「個別の指導計画作成支援ソフト（中学校・高等学校版ver.1）」は、同ページに掲載する予定です。